

【研究ノート】

イスラームにおける

「神の威厳（‘aẓamat Allāh）」のイメージ

ークルアーンと神名注釈よりー

加藤 瑞絵

I はじめに：本稿の目的

筆者がアブー・シャイフ Abū al-Shaykh ‘Abd Allāh b. Muḥammad (d. 979) の『威厳の書 (Kitāb al-‘Aẓamah)』⁽¹⁾の存在を知り、関心を持つようになったのは、イスラーム思想史上最大の思想家とも評されるガザーリー Abū Ḥamid al-Ghazālī (d. 1111) の代表作『宗教諸学の再興 (Iḥyā’ ‘Ulūm al-Dīn)』第4巻第9書「瞑想の書 (Kitāb al-Tafakkur)」の分析を通し、『威厳の書』が同書に影響を与えたと考えられると知ったことがきっかけである。クルアーンにしばしば述べられるように、天地の創造、太陽、月、星、雨風、動植物、農作物など、自然界の様々な現象や事物は神の力を示す徴 (āyah) であり、そして神が人間へ与えた恩恵である。『威厳の書』は、このような神の徴に関する多くの伝承⁽²⁾を集めた著作である。同書のユニークさの1つは、様々な自然現象について、ギリシア由来の科学による説明を一切取り上げることなく、専らイスラーム初期のムスリムによる物語的な説明を集めている点である⁽³⁾。例えば、雷は雲を任された天使で、稲妻は天使が持つ火からできた棒、雷鳴は天使が雲を追い立てる声であると説明したり⁽⁴⁾、海の満ち干は、天使が海に足を出し入れすることで海面水位が変化するものだと説明したりするのである⁽⁵⁾。これらは、初期イスラームの世界観を伝える興味深い資料であるといえる。

他の伝承集には見られないような珍しい伝承を多々含むこと、専ら伝承を引用するのみで、著者自身の考えを述べた部分がほぼ皆無であることは、同書の分析

を困難にする要因である。また、長く写本のままに留まっていたため、先行研究も極めて少ない。さらに、アブー・シャイフの筆によるもの以外に同名著作が複数存在していることも、検討しなければならない課題の1つである。9～16世紀にかけての長い期間に、複数の人物が『威厳の書』という題名の著作を残しているのだが、これを1つの確立したジャンルと捉えてよいか、また、ジャンルとして捉えられるのであれば、それはどのようなものであるといえるか、見解は定まっていない¹⁰。そこで本稿では、『威厳の書』研究の一助として、クルアーン及び神名注釈における‘aẓamah、‘aẓīm（‘aẓamahの形容詞形で、神の美称の1つでもある）の用例を分析し、イスラームにおいて「神の威厳（‘aẓamat Allāh）」という言葉が持つイメージを探っていく。

クルアーン中の用例については、ジマレ D. Gimaret『イスラムにおける神名（*Les Noms Divins en Islam*）』に簡潔な紹介がある。‘aẓīmという形容詞は、クルアーンの中に100回以上現れるが、神自身に用いられた箇所はごく限られた数に過ぎない。そして多くの場合、「1つの抽象的な事柄（une chose abstraite）」、すなわち来世における信者への報酬、彼らがそこで勝ち取る勝利、不信仰者たちがそこで受ける懲罰、審判の日、神により与えられる恩寵などに用いられる。また、具体的なものに用いられた場合もわずかにあり、それらは山、シバの女王の玉座、神の玉座、イブラーヒーム（アブラハム）の子孫に与えられた王国である¹¹。本稿ではより詳細な分析を通して、クルアーンでは神の威厳が何によって根拠づけられているか、信者への報酬や恩寵とは何か、また、‘aẓīmという形容詞が神自身に用いられた場合とその他のものに用いられた場合との間に共通点はないかを明らかにする。‘aẓīmが神に用いられた章句については、クルアーン注釈書での議論も併せて検討する。ここではタバリー Muḥammad b. Jaʿir al-Ṭabarī（d. 923）のクルアーン注釈書を主に参照する。彼はアブー・シャイフより時代的に少し前にあたるが、ほぼ同時代を生きている（タバリー没年にアブー・シャイフは40歳くらいである）。加えて、タバリーの注釈書は多くの伝承を収録しており、当時の様々な解釈を知ることができるためである。但し、‘aẓīmという語について有意味な説明がない注釈については言及しない。

神名注釈に関しては、クシャイリー ‘Abd al-Karīm al-Qushayrī（d. 1072）、バイハキー Aḥmad b. al-Ḥusayn al-Bayhaqī（d. 1066）、ガザーリーらの著作を取り上

げる。時代的にはアブー・シャイフよりも後になるが、特に前二者については伝承を引きながら議論をしているため、それらを通して彼ら以前から伝わる解釈も知ることができるだろう。

イスラーム思想史において、神名は重要なテーマの1つであった。神学においては、名前が「名指されるもの」自体である神に一致するものか、あるいは人間側の「名指し」行為であるかが議論となった。また、神秘主義的文脈においては、神名を通して人間が神の性質を身に付け、神に近づくことが説かれた⁹⁾。例えば、イブン・アラビー Ibn al-‘Arabī (d. 1240) が説く完全人間は、99 ある全ての神名を帯びた存在である⁽¹⁰⁾。しかしながら、本稿ではこうした問題には立ち入らないでおく。

II 分析

1. ‘aẓīm である神

‘aẓīm という語は、比較・最上級形 a’ẓam に変化したものを含めて、クルアーンの中に 110 回現れる。‘aẓmah という名詞形は一度も用いられない。神自身を形容する語として用いられた箇所は計 6 箇所、第 2 章 255 節、第 42 章 4 節、第 56 章 74 節、同 96 節、第 69 章 33 節、同 52 節である。これらのうち第 2 章 255 節と第 42 章 4 節が同じ表現であり、また第 56 章 74 節、同 96 節、第 69 章 52 節が同じ表現となっている。

「彼は至高にして至大であられる (huwa al-‘alī al-‘aẓīm)」

(2 : 255、42 : 4) ⁽¹¹⁾

第 2 章 255 節は「玉座節 (āyat al-kursī)」と呼ばれる⁽¹²⁾。前節までの内容とは直接に連続していないと捉えられるので、以下にこの 255 節のみ全体を引用してみる（便宜上、各行に連番を付す）。

1. 神、彼の他に神はなく、永生に自存される御方。
2. 仮眠も熟睡も、彼をとらえることはできない。
3. 天にあり地にある凡てのものは、彼のものである。

4. 彼の許しなくして、誰が彼の御許で執り成すことができようか。
5. 彼は（人々の）、以前のことも以後のことをも知っておられる。
6. 彼の御意に適ったことその他、彼らは彼の御知識について、何も会得するところはないのである。
7. 彼の玉座は、凡ての天と地を覆って広がり、この2つを守って、疲れも覚えられない。
8. 彼は至高にして至大であられる。

玉座に座した神は、被造物を超えた高みにあり、天と地の中にある全てを知り、支配する強大な存在である。神の玉座が「凡ての天と地を覆って広が」という表現（7行目）は、視覚的なイメージを読み手に与える。それほど大きな玉座の主である神の至大さとは、どのようなものであるか。タバリーは彼の注釈書の中で、「あらゆるものがその下にあり、それよりも大いなるものはない至大さの持ち主」⁽¹³⁾であり、また「その至大さが完全なもの」⁽¹⁴⁾ともいわれると紹介している。さらに、「至大であられる」（8行目）という文言に関して人々の見解は異なるとして、3つの説を紹介している⁽¹⁵⁾。まず第一は、文法的な説明による。アラビア語で、mufa‘al という形が fa‘il という形に変化することから、「至大であられる（‘aẓim）」は mu‘azzam となる。そしてその意味は、彼の創造物たちが彼を強大なものとし（yu‘azzimu-hu）、彼を敬い、畏れるような存在のことである。神の至大さは、平面や重量に関して「それは大きい」という場合とは意味が異なるのである⁽¹⁶⁾。この説では、神の至大さに畏敬の意味を込めている。残りの2つの説は、至大さを神の属性（ṣifah/waṣf）として説明する。2つのうち先に紹介された説によると、神の至大さは、その様態を叙述することはできず、人間についていわれる大きさと類似した意味でもない。このように述べる人々は、第一に挙げられた解釈を否定する。なぜならば、神が創造の業をなす以前に、神を強大なものとし、畏敬する者（mu‘azzim）、すなわち神以外の存在が必要となってしまうからである⁽¹⁷⁾。最後の説は、神自身は至大さによって特徴づけられ、神以外の被造物は、神の至大さに比べて小さいために、小ささによって特徴づけられるというものである⁽¹⁸⁾。

神の至大さがどのようなものであるかを伝える伝承は、スューティーヤ Jalāl

al-Dīn al-Suyūfī (d. 1505) のクルアーン注釈書の中にも紹介されている。アブー・シャイフの『威厳の書』第9章、神の玉座と足台に関する章からの引用である。それによると、ムハンマドがタブーク遠征から帰還する際、ファザーラ族⁽¹⁹⁾の一群と出会い、彼らはムハンマドに向かって次のように言った。「我々に雨を降らせてくれるよう、お前の神に願ってくれ。我々のために、お前の神に執り成してくれ⁽²⁰⁾。お前の神が〔我々のために〕お前に執り成してくれるように。」この言葉に対しムハンマドは、神が誰かに執り成しをするようなことがあろうかと怒る。そして、玉座節（7行目）から引用しながら次のように言う。「至大なる御方以外に神はなし。『彼の玉座は、凡ての天と地を覆って広がり』（2：255）、彼の至大さと荘厳さに、大地は啼き声を立てる。ちょうど新しい駱駝の鞍が音を立てるように。」⁽²¹⁾神の至大さに比べれば、広大な大地すら弱く小さな存在に過ぎないのである。

第42章4節全体は、第2章255節の3行目及び8行目と同じ文言からなっている。直前の第42章3節では神が偉力並びなく英明であることを言明し、続く5節では、天が神を畏れて砕けようとし、天使たちは主を称え、地上のものたちのために赦しを請うとある。タバリーは4節の「至大であられる」について、次のように説明している。「威厳（al-‘aẓamah）と偉大さ（al-kibriyā’）と強制（al-jabriyah）を持つ御方」⁽²²⁾。ここでも、これ以上の説明がなく判然としない部分が残るものの、「強制」という言葉からは、神の至大さの中に威力の意味を込めていることが読み取れる。

ここで、神名注釈における議論を検討してみよう。クシャイリーは、神についていわれた‘aẓīm を部分の大きさの意味によって理解することは、神の本質において不可能であると述べる。というのは、神は永遠で唯一であり、全ての知の対象を知り、全ての力の対象に力を及ぼすような包括的存在だからである。神があらゆるものを超越し、かつ包括する大いなる存在であることを、幾つかの伝承によって強調している。その中の1つには次のようにある。ある天使が、神の玉座を見たいので、見える高さまで飛べるように私の力を増して欲しいと神に懇願する。すると神はその天使に3万の翼を創造し、それによって天使は玉座へと向かって飛び始める。しかし、3万年飛んでも玉座の足元にも至らず、結局、天使は神に頼んで元の場所に帰してもらう⁽²³⁾。このように、天使ですら神の創造の至大

さの前には弱く小さな存在である。人間が到底思い浮かべることできないほどの神の至大さは、物体の大きさによって語ることはできず、その正しい意味は、高さや栄光といった性質に彼が相応しいということに由来するのである⁽²⁴⁾。

バイハキーは、いかなる場合も彼を妨げることができないような者、彼に反抗し、その命令に違うことができないような者が「威厳ある者」であるという伝承を紹介している⁽²⁵⁾。これは、タバリーが第42章4節について述べた説明と類似しているだろう。また、バイハキーが引用する別の伝承によれば、「至大者」とは威厳と崇高さの持ち主のことであり、重要性が甚だしく、位階の絶頂にあることを意味し、物的な大きさとは異なるものであるという⁽²⁶⁾。

ガザリーの場合、‘azīm という語がまず最初に物体に用いられることを知らねばならないという言葉から議論が始まる。しかし、空や大地のように、人間の視界がその全体を捉えられないような巨大なものもある。同様に、理性にもその本質を理解できる対象物と、理解できない対象物がある。そして、あらゆる理性の限界を超え、その本質を理解することが想定できないような、絶対的に大いなるもの（al-‘azīm al-muṭlaq）が神なのである⁽²⁷⁾。

クルアーンの中で神自身に‘azīm が用いられた残りの用例は、次の通りである。

「本当に彼は、威厳ある神を信じず（inna-hu kāna lā yu’min bi-Allāhi al-‘azīm）」（69：33）

「だから威厳ある御方、あなたの主の御名を称えなさい（fa-sabbih bi-ismi rabbika al-‘azīm）」（56：74、96、69：52）⁽²⁸⁾

第69章は、神が遣わした使徒に従わなかったために、神によって滅ぼされたサムードとアードの民⁽²⁹⁾、フィルアウン（ファラオ）ら過去の人々について述べ、「威厳ある神を信じ」ない不信仰者（33節）には来世で苦しい罰が待っていることを説く。第69章52節の「だから…」とは、そのような罰に遭わないよう、神を信じることを勧めるものである。本章の文脈では、不信仰の民を滅ぼし、地獄で苦しい罰を与え、信仰者には楽園での至福の生活を与える点に、神の威厳を見出していると理解できる⁽³⁰⁾。

第56章74節の直前までは、終末の出来事（1～14節）楽園の様子（～40節）、

地獄の様子（～56 節）、神の創造の業と、その創造に感謝すべきこと（～73 節）が語られる。神の創造については、人間、植物、水、火に言及し、それらを創り育て、また死なせるのも神であることを述べる。74 節は、これらの業をなす威力ある神に感謝する者となり、来世で楽園に入り、地獄の罰を逃れるために神の名を称えよと促していると捉えられる。74 節の後には、クルアーンが神からの啓示であること（～80）、それを軽んじる者たちへの警告（～87）、楽園での至福の生活と地獄の罰の描写（～95）が繰り返され、同 96 節へと続く。これも、来世で楽園の幸福に与り、地獄の罰を逃れるために、神の名を唱え、神を信じるよう勧めるものと理解できる。本章の文脈では、人間に楽園か地獄を与えること（上述第 69 章の内容）に加え、終末の時と来世を支配し、世界の多様な生き物や自然現象を司るという点にも、神の威厳を見出していると捉えられる。このような観点は、神名注釈の中にはあまり見出せない。先に紹介したクシャイリーにあるように、神の創造の力がどれほど強大であるかを伝える伝承が引かれている程度である⁽³¹⁾。

以上から、クルアーンや神名注釈において神が‘aẓīm であるという場合、その意味するところはおおよそ次の 3 点に整理できるだろう。①単なる物体の大きさによって描写できず、人間には到底知りえないほどの「至大さ」を持つ者である。②現世及び来世において人間に賞罰を与え、全てを支配する威力の持ち主として、大いなる者である。③この世界を創造し育て、それを通して人々に糧を与える力の持ち主として、大いなる者である。

2. 神以外に‘aẓīm であるもの

それでは次に、神以外のものに‘aẓīm の語が用いられた箇所を検討する。計 104 箇所あるが、以下、それらのうち複数例あるものを、用例の多い順に示してみよう。

1) 報奨 (ajr) 19 箇所

善行を為す者へは報奨があると述べる章句が最も多い（4 : 40、114、162、5 : 9、33 : 29、48 : 29、73 : 20）。報奨の対象となる善行については、礼拝や喜捨など、具体的な信徒の義務を示している場合もある。戦いに参加し奮闘した者への報奨（3 : 172、4 : 67、74、95、48 : 10）を語る章句もあるが、戦い（ジハード）も、ムスリムにとっての善行の 1 つといえよう。その他の表現としては、

神の御許にある報奨（8 : 28、9 : 22、64 : 15）、信者、主を信じる者への報奨（3 : 179、4 : 146、33 : 35、49 : 3）といった表現が見られる。神の御許にある報奨として、第9章22節では、それが樂園での永遠の安住であることを告げている。

2) 成功・獲得 (fawz) 16 箇所

信徒が永遠に樂園に住むことを、大いなる成功であると述べる章句が最も多い（4 : 13、5 : 119、9 : 89、100、111、37 : 60、40 : 9、44 : 57、48 : 5、57 : 12、61 : 12、64 : 9）。その他は、神が信徒に対し満足することを樂園よりもよい成功であると述べる章句（9 : 72）、信仰する者には、樂園という来世の報奨だけではなく、現世においても吉報があり、これが大いなる成功であると述べる章句（10 : 64）である。残りの1つは、ウフドの戦いで従軍しなかった似非信者の言葉であり（4 : 73）、神が信徒に与える成功や獲得とは性質が異なる。

3) 罰 (‘idhāb) 15 箇所

不信仰者や、信仰者に害をなす者、似非信者に対する厳罰を述べた章句が最も多い（2 : 7、114、3 : 105、176、5 : 33、41、9 : 101、16 : 94、106、45 : 10）。これらの者たちには、神が現世において恥辱を与え、来世においても罰を下すという。信徒に対して罰が下されることもあり、ムハンマドの妻アーイシャの醜聞事件⁽³²⁾に關与した者への罰（24 : 11、14、23）、信徒を故意に殺害した者への罰（4 : 93）を述べる章句がある。アーイシャの事件に関しては、神の恩恵と慈悲により実際に罰は下されなかった（24 : 13）が、「貞節な信徒の女を中傷する者は、現世でも来世でもきつと呪われよう」（24 : 23）とある。信徒を故意に殺害した者については、神の怒りを買ひ、地獄に入れられる（4 : 93）という。その他に、戦利品の獲得について、もし神が規則を下していなかったならば（実際には規則を下していたので、そのような事態にはならないが）、その行為は厳罰に値することになったであろうとの章句（8 : 68）も、信徒に対する罰を述べたものである。

4) 日 (yawm) 10 箇所

ムハンマド以前に遣わされた預言者とその民（上述のアードやサムードの民など）とのやり取りの中で、「大いなる日の懲罰」を恐れると述べる章句（7 : 59、26 : 135、156、189、46 : 21）、主に背けば訪れるであろう「大いなる日の懲罰」を恐れると述べる章句（6 : 15、10 : 15、39 : 13）がある。ムハンマド以前の過

去の民に関しては、上述のように神の怒りを買ひ、滅ぼされた出来事が「大いなる日の懲罰」であると理解できる。その他の場合は、「大いなる審判の日」（19 : 37）や、「これらの者〔秤の計量をごまかす者〕は、甦ることを考えないのか、大いなる日に」（83 : 4－5）のように、終末が到来し、復活した人々に最後の審判が下される日（yawm al-qiyāmah）のことを指すと考えられる⁽³³⁾。

5) 徳 (faḍl) 8 箇所

うち 7 箇所が、神を「大いなる恩恵の主 (dhū al-faḍl)」⁽³⁴⁾と呼ぶ章句である (2 : 105、3 : 74、174、8 : 29、57 : 21、29、62 : 4)。神が御心に適うもの、信徒のために恩恵を施すことを述べ、その恩恵とは樂園であるとする章句もある (57 : 21) が、ほとんどの場合、恩恵が何かであるか具体的に述べていない。第 4 章 113 節及び第 62 章 4 節の文脈では、神が授ける啓典と英知、神が人々に知らないことを教えることが、恩恵の 1 つであると理解できる。

6) 玉座 (‘arsh) 4 箇所

1 箇所のみ、サバの女王の玉座を述べ (27 : 23)、その他は神の玉座のことを述べた章句である (9 : 129、23 : 86、27 : 26)。

7) 試練 (balā’) 3 箇所

神が過去の民に対して与えた試練であり、エジプトで奴隷状態にあったイスラエルの民に関するものである (2 : 49、7 : 141、14 : 6)。

8) 災難 (karb) 3 箇所

ヌーフ（ノア）の呼び掛けに応じなかった不信仰者たちが、洪水によって沈められた出来事を指して大いなる災難という章句 (21 : 76、37 : 76)、ムーサー（モーセ）とハールーン（アaron）及びその民を、神が大いなる災難から救ったと述べる章句 (37 : 115) がある。

以上から、6) の玉座を形容する以外、多くが現世及び来世における神からの賞罰、試練、そして来世での賞罰を決定する場である最後の審判と関連するものであることが分かる。但し、報奨や恩恵については、来世における樂園であると述べられたもの以外、判然としない部分が残る。Ⅱ－1 最後の整理①～③と比較してみると、次のように関連を指摘できるだろう。玉座に関しては、①のように人間には知りえない至大さを持つ神が座し、天地を覆うと形容されるものとして、やはり大いなるものである。現世及び来世における賞罰、試練、最後の審判は、

②全ての采配者として神が下すものであり、これらもまた大いなるものであるとされている。

Ⅲ. おわりに

分析を通し、人間には知りえない至大さを持ち、現世及び来世において人間に賞罰を与え、この世界を創造し育て、人間に糧を与える者であるゆえに、神が「威厳ある者」と呼ばれていることが捉えられた。そして、ジマレが「1つの抽象的な事柄」と呼んだもの、すなわち神以外に‘aẓīm であるものも、神を「至大者」「威厳ある者」と呼ぶときに根拠となる事柄と密接に関連していることが分かった。一見異なるように思われるⅡ-1、2の用例は、しかしながら多くの場合に共通した意味合いを持っているのである。但し、神以外のものに‘aẓīm の語が用いられた場合、分析1の最後に③として指摘した要素（世界の創造に関するもの）はほぼ見出されない。例えば、この世界における神の創造の一部であり、ジマレも指摘していた「山」にこの形容詞が用いられた例は1箇所のみ（26：63）であった。『威厳の書』同名著作の中で、来世、楽園と地獄の描写に富むものは、イブン・アビー・ドゥンヤー Ibn Abī al-Dunyā (d. 894) による『威厳の書』である。さらにそこでは世界の諸層の多さ、その果てしない大きさについて繰り返し述べられている⁽³⁵⁾。アブー・シャイフの『威厳の書』の場合、自然界の現象や事物に関する伝承以外に、神に関する事柄、玉座、天使、楽園と地獄などに関する伝承も収録している。この点において、アブー・シャイフの『威厳の書』は、神の威厳の顕現をより包括的に扱った著作であるといえるだろう。

(1) Abū Shaykh, *Kitāb al-‘Aẓamah*, ed. by Riḍā’ Allāh ibn Muḥammad Idrīs al-Mubārakfūrī, 5 vols., Cairo: Dār al-‘Aṣimah, 1998（以下‘Aẓamahと略記し、巻数と頁数を示す）。著者及び同書についての概説は、拙稿「アブー・シャイフ著『威厳の書』序論分析」『イスラーム世界研究』2/2(2009)、176-187を参照。以下にも述べるように、‘aẓamah/‘aẓīm はまず「大きいこと」を意味するが、同書で語られる事柄が単なる「大きさ」ではなく、神の偉大さ、素晴らしさを示すものであること、及びアラビア語の他の「大きさ」を示す語と訳し分ける必要から、「威厳」という訳を採用した。但し本稿においては、文脈によってクルアーン訳などに基き、「至大」など異なる訳語を用いた箇所もある。

- (2) 預言者ムハンマドの言行を伝える伝承をアラビア語で「ハディース（ḥadīth）」というが、『威厳の書』の場合、預言者まで遡らず、預言者から直接教えを受けた教友や、それ以降の人物の言行を伝えるものも多く含む。そのため、本稿ではそれらをまとめて「伝承」という言葉で呼ぶこととする。
- (3) Heinen, *Islamic Cosmology: A Study of as-Suyūfī's al-Hay'a as-Saniya fi l-Hay'a as-Sunniya, with Critical Edition, Translation, and Commentary*, Beirut: Orient-Institut der deutschen morgenländischen Gesellschaft, 1982, 43（以下 *Cosmology* と略記）。
- (4) Abū Shaykh, *‘Aẓamah*, Vol. 4, 1279.
- (5) Abū Shaykh, *‘Aẓamah*, Vol. 4, 1406-1407.
- (6) 同名著作については、Heinen, “Tafakkur and Muslim Science,” *Journal of Turkish Studies* 18 (1994), 106-107（以下“Tafakkur”と略記）及び拙稿『『威厳の書』と呼ばれる著作群について』『オリエント』49/2 (2006)、246-247 を参照。ハイネンは『威厳の書』同名著作が持つ多様性を認めながらも、1つのジャンルとして捉えている。Heinen, “Tafakkur,” 104. それに対し、アブー・シャイフの『威厳の書』校訂者であるムバーラクフリー、レイヴン W. Raven は、複数の著者による同名著作の存在を指摘しつつも、確立した 1つのジャンルとしては捉えていない。Abū al-Shaykh, *‘Aẓamah*, Vol. 1, 110-114; Raven, “A Kitāb al-‘Azama: on Cosmology, Hell and Paradise,” in F. De Jong (ed.), *Miscellanea Arabica et Islamica: Dissertationes in Academia Ultrajectina Prolatae anno MCMXC*, Leuven: Peeters, 1993, 135-142.
- (7) 神には「アッラー」をはじめ、「慈悲深き者」、「全知者」などの美称があり、その数は99であるとされている。
- (8) Gimaret, *Les Noms Divins en Islam: Exégèse Lexicographique et Théologique*, Paris: Les Éditions du Cerf, 1988, 208-209（以下 *Les Noms* と略記）。
- (9) 青柳かおる『イスラームの世界観：ガザーリーとラーズィー』（明石書店、2005年）、第3章第2～3節参照。
- (10) Tosun Bayrak al-Jerrahi al-Halveti, intro. by W. C. Chittick, *The Name & the Named: The Divine Attributes of God*, Fons Vitae, 2006, 17-18; Ibn ‘Arabī, *Futūḥāt al-Makkīyah*, 9 vols., Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmiyah, 2006, Vol. 6, 152.
- (11) 「大きさ」という観点からも説明される句である（後述）ため、「威厳」ではなく、邦訳にある「至大」という訳語をそのまま採用した。尚、本稿のクルアーン訳

は、主として『日亜対訳注解聖クルアーン』（日本ムスリム協会、1996年改訂版）に拠る。但し、訳語や表記を変更したところもある。同翻訳書では、‘aẓīm の訳語には「至大」「偉大」などがあり、統一されていない。

(12) 伝承によれば、ムハンマドは同節が呪術的な力を持つと信じていたという。例えば、夜寝る前に同節を唱えると、天使がやってきてその者を守り、朝まで悪魔は近づけない。ブハーリー、牧野信也訳『ハディース』全6巻（中公文庫、2001年）、第4巻、555頁。

(13) al-Ṭabarī, *Tafsīr al-Ṭabarī musannmā Jāmi‘ al-Bayān fī Ta’wīl al-Qur’ān*, 13 vols., Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmiyah, 1999, Vol. 3, 14（以下 *Tafsīr* と略記）。

(14) al-Ṭabarī, *Tafsīr*, Vol. 3, 14. ムハンマドの従兄弟で、代表的な教友でもあるイブン・アッバース Ibn ‘Abbās (d. 687 or 688) が伝えた言葉。

(15) それぞれの説が、どのような集団・学派によって唱えられたものであるかという説明はない。以下本文中で紹介するように、諸説は断片的で判然としない部分も残る。

(16) al-Ṭabarī, *Tafsīr*, Vol. 3, 14-15.

(17) al-Ṭabarī, *Tafsīr*, Vol. 3, 15.

(18) al-Ṭabarī, *Tafsīr*, Vol. 3, 15. 最後の説と同様の内容が、第69章52節の注釈にもみられる。「威厳ある者とは、あらゆるものが彼の至大さと比べて小さいものである。」 al-Ṭabarī, *Tafsīr*, Vol. 12, 224.

(19) ムハンマドに敵対し続けたガタファーン族の下位集団。ファザーラ族は一度ムハンマドに従うも、彼の死後には一族の多くがイスラームから離反した。しかしその後、再びイスラーム勢力に服従させられる。W. M. Watt, “Fazāra,” in eds. by A. H. R. Gibb et. al., *The Encyclopaedia of Islam*, New Edition, 13 vols., Leiden: Brill, 1960-2009, Vol. 2, 873.

(20) 「執り成し」は、クルアーン第2章255節4行目にも現れる語。基本的な意味は「仲介」。イスラームにおいて、最後の審判で罪の赦しを神に執り成すことは、預言者の中でも特にムハンマドに与えられた特権であると考えられている。

(21) al-Suyūfī, *al-Tafsīr al-Durr al-Manthūr fī al-Tafsīr al-Ma‘thūr*, 8 vols., Bayrūt: Dār al-Fikr, 1983, Vol. 2, 10; Abū Shaykh, *‘Aẓamah*, Vol. 2, 637-638. スューティーのテキストは、訳出した部分の最後の二語が『威厳の書』と異なっている。訳文では『威厳の書』のテキストを採用した。スューティーの著書『スンナの天文学における高貴なる天文学（*al-Hay’a as-Saniya fī al-Hay’a as-Sunniya*）』は、アブー・シャイフの『威厳の書』を重要な情報源としている。注3に示したハイネンの研究書を参照。

(22) al-Tabarī, *Tafsīr*, Vol. 11, 128.

(23) al-Qushayrī, *al-Taḥbīr al-Tadhkīr*, al-Qāhirah: Dār al-Kātib al-‘Arabī, 1968, 56（以下、*al-Taḥbīr* と略記）。

(24) *ibid.*

(25) al-Bayhaqī, *Kitāb al-Asmā’ wa-al-Ṣifāt*, Bayrūt: Dār Iḥyā’ al-Turāth al-‘Arabī, n. d., 33.

(26) *ibid.*

(27) al-Ghazālī, *Maqṣad al-Asmā’ fī Sharḥ Ma’ānī Asmā’ Allāh al-Ḥusnā*, Bayrūt: Dār al-Mashriq, 1982, 112-113.

(28) この章句についてジマレは、‘aẓīm が「あなたの主」にかかるのか、あるいは「名」にかかるのかは問題として残ると述べている（Gimaret, *Les Noms*, 208）。神の 99 の美名の中で、何が最大の (a’ẓam) 名前であるかという議論が存在するからだ（*ibid.*, 85 ff.）。しかしながらこの文言に関していえば、「名」を修飾する語として捉える解釈は、管見の及ぶ限りクルアーン注釈書や翻訳書には見つからず、全て「あなたの主」を修飾するものとして理解している。

(29) クルアーンにおいて、神が遣わした使徒を信じず、神の怒りを買って滅ぼされた古代部族であるとされる。こうした懲罰物語は、クルアーンの主要なテーマの 1 つである。リチャード・ベル著『コーラン入門』匠王秀行訳（ちくま学芸文庫、2003 年）、第 7 章「懲罰物語（サマーニー）」参照。

(30) クルアーンの基本構成単位は「章」ではなく「節」であり、クルアーンの編纂過程で、短い節が繋ぎ合わされて章にまとめられた。その際、本来連続していた節を切り離し、間に別の文言を挿入したと考えられる部分が多々あるという。ベル、前掲書第 5 章「改定と書き換え」「裏面を用いた編集」参照。そうであれば、章内の文脈を考慮することに妥当性はないかもしれない。しかしながら、元来の繋がりが全くなくなっているわけではなく、さらに、そのような編纂過程を経て成立したクルアーンに基づいて思索を行なった人々の思想を明らかにしようとするときに、章内の文脈を考慮することは、有意味であると考ええる。

(31) 先に本文中で紹介した以外に、神にとっては 100 万の世界を創造することでさえ、虱 1 匹を創造することより困難であることはない、などと述べる伝承が引かれている。Qushayrī, *al-Taḥbīr*, 56.

(32) ムスタリク族への遠征の際に起きた事件。ムハンマドに同行したアーイシャが、途中、仲間に気付かれず置いていかれてしまったところを、遅れて通りかかった男が見付け、彼女を駱駝に乗せて仲間に追い付いた。これを見た一部の信徒が、彼女

を中傷したのである。この逸話はイブン・イスハーク著『預言者伝』第19章に述べられている。現在、邦訳が刊行中 (イブン・イスハーク著、イブン・ヒシャーム編註『預言者ムハンマド伝』後藤明他訳、2010一、岩波書店) であるので、第3巻 (2011年刊行予定) を参照されたし。

- (33) 「大いなる日の懲罰」を恐れると述べる第6章15節他は、神がムハンマドに対し、不信仰者たちに「[次のように] 言ってやるがいい」として語った内容に含まれた文言。これらの章句の中には、「審判」や「甦る」などの語は現れず、「大いなる日」が終末の日を指すか、クルアーンの文言からだけでは分らない。しかしクルアーン注釈を見ると、「復活の日 (yawm al-qiyāmah) のこと」とある。マハッリー、スューティー著『タフスィール・アル=ジャラーライン (ジャラーラインのクルアーン注釈)』中田香織訳、全3巻 (日本サウディアラビア協会、2002-2006年)、第1巻、320頁、第2巻、80頁 ; al-Maḥallī & al-Suyūṭī, *Tafsīr al-Jalālayn*, Mu’assasat al-Mukhtār: al-Qāhirah, 2004, 184, 235.

- (34) これ自体を神の美称の1つとする説もある。Gimaret, *Les Noms*, 389-391.

- (35) 著者は不明であるが、イブン・アビー・ドゥンヤーの『威厳の書』と同様の内容の写本も複数残されている。注6に示した論考においてレイヴンが扱った写本の他、カマールが扱った写本もそうしたものである。Kamal Abū Dīb, *al-Adab al-‘Ajā’ibī wa-al-‘Ālam al-Gharā’ibī fī Kitāb al-‘Azamah wa-Fann al-Sard al-‘Arabī*, Beirut: Dār al-Sāqī, 2007.